

よきかな若人

～飯綱山こそわれらが希望～

祝
卒業

令和二年度卒業証書授与式 学校長式辞

雪に覆われた飯綱山を遠目に見ながら、過ぎゆく風の柔らかさに、長かった冬の終わりを感ずる頃となりました。本日ここに、飯綱町長 峯村勝盛 様、飯綱町議会議長 大川憲明 様、飯綱町教育長 馬島敦子 様ご臨席のもと、令和二年度卒業証書授与式を挙行できますことに、職員を代表して厚く御礼申し上げます。七十五名の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

併せて保護者の皆様、本日はお子様のご卒業、誠におめでとうございます。思い返せば背中が隠れるほどのランドセルを背負いながら、学校へ向かう後ろ姿を、じつと見送ったあの日から、九年の歳月が流れました。多感な中学校時代には、共に悩み、共に笑い、心配する気持ちを胸の奥に閉じ込めて、そつと見守る日々もあったかと思えます。おかげさまで、これだけ逞しく成長できました。改めて感謝申し上げます。

卒業生の皆さん。今、私は別れを前に、皆さんとの日々を思い浮かべています。

友だちと語り合いながら学んでいた授業

毎日交わしていた「おはよう」「さようなら」

廊下でこぼした不平不満

一緒に磨いた雑巾がけ

土埃あげ競った校庭

私の頭をよぎるのは、皆さんのごく当たり前の日々です。先日、水槽の中を泳ぐ魚たちを眺めながら思ったことがあります。「果たして、この魚たちは、水の存在に気づいているのだろうか。水の存在は当たり前過ぎて、それなくしては生きてはいけないことに気づいていないのではなからうか。」翻って、私たちはどうでしょうか。これまで学校に行き、先生や友だちと出会い、勉強をし、運動をし、給食を食べ、帰る家がありました。恥ずかしながら私自身も、それは当たり前であり、魚が水を思うが如く、過ごしていたように思います。しかし、「学び舎の中で巡り逢えた奇蹟」、当たり前前の奇蹟をこの一年間思い知らされました。休業を経験し、部活動の大会も修学旅行もできないという前例のない経験をした皆さんにとっても、それは同じではないでしょうか。ただ、今となつては、そんなありふれていた日々さえ戻すことはできません。できることは、これからの「毎日を 一瞬を 愛しく想い」、いま、ここを切り拓いて

いくだけです。

全ての行事が吹き飛ばされそうな一年の中で、やり遂げた事がありました。「万里一空」のスローガンのもと、感動を巻き起こした飯綱校祭。あのとき、みなさんはなぜ、あんなにも必死で、なぜ、あんなにも一生懸命だったのでしょうか。そしてなぜ、あれ程までに感動したのでしょうか。自分なりに思い出してみてください。あなたが見つけた答えは、きっとこれからの生きる礎になるはずです。ただ言えるのは、あの時の感動は、勝った、負けた等とは別の次元にあったということです。人からの評価とはかけ離れた世界にあったということです。飯綱校祭のあった日、私は自分のノートにこう記しています。

一番を目指してもよい。しかし、一番でなくてもよい。

成功を目指してほしい。しかし、失敗してもよい。

期待に応えようと励むのもよい。しかし、期待に応えられなくてもよい。

活動的にとびまわってもよい。しかし、静かに止まってもよい。

有名になるのもよい。しかし、人知れず生きるのもよい。

大事なことはただ一つだけ。君が君として輝いていること。

歴史をひもとけば、人間は違いを排除し、自分の利益を優先し、幾度となく争いを繰り返してきました。人を傷つけ合い、奇蹟であったはずの誰かの当たり前を奪ってしまうことがあったのです。コロナ禍の中で、「当たり前が幸せと知った」私たちだからこそ、これから先、人は何を大事にすべきなのか、考えねばならないと思えます。一方で未来を見つめれば、IT革命、人口の急増、環境問題、社会経済の変動など、激動の流れの中で予測不可能な世界が待ち構えています。その中では、「つまずいたり、転んで泣いてみたり」、上手く生きることができなくて、自信を失うことがあるかもしれません。そんなときは、この飯綱山を思い出してください。あの日、あのとき、輝いていた自分を、応援してくれている仲間を思い出してください。万里一空。「見える景色は違っても 遠いところで 君も同じ空 きつと見上げているはず」です。

最後になりました。さあ、旅立ちのときです。みなさんが、自分の手で、自分の足で自らの道を拓いていく後姿を、今となつては、ランドセルもすつかり似合わなくなつてしまったあなたの後ろ姿を、あの日と変わらずに、ここにいる全員が見守り続けます。

令和三年三月二九日

飯綱中学校長 藤木拓道